

悲しめるわが心を慰めるだろう”

と結ぶ。

ワーズワスは約二十年後、もう一度ヤロオを訪れた。イタリーに旅立つ詩人スコットにありためであった。この時の詩には何か安心感、落付きといったものが私には感じられた。

ところで、私の最初のヤロオの旅は1966年の夏、一年間ニューヨークで研究してきた帰りである。二回目は76年の8月中旬、モスコウの国際地理学会のあとの旅で、それは完全な休息旅行でもあった。最初のような物凄い感激はなかったけれど、すべてを忘れてセント・メリーを觀賞した。静かにワーズワスの詩を口づさんだりもした。こんな私に、“ワーズワスの旅なんてなんとも優雅ですてきですね。でも舞踏会の手帖——往年のフランス名画——みたいじゃないですか”と、暑い東京で私のアルバイトをしていて下さる津田塾大のH嬢から、ホテルに手紙がきていた。舞踏会の手帖でもかまわない。私はこよなくワーズワスを、そしてヤロオを愛するのだからといいかせた。

ふと、学問の世界だって似たようなものじゃないかと私は思った。こんな研究をしようか、それともこうしようかとアイデアを浮べているときはとても楽しい。でも一寸ばかりコワイのも事実。いざ着手して成果がでてくると、こんな筈ではなかったのにと落たんしたり、時には喜んだり。

もう一人、私の好きな詩人にジョン・キーツがいる。“ギリシャのつばによせて”という詩の中に、

“きこえるメロディーは美しい、

しかしきこえないメロディーはより美しい”

といった言葉がある。お祭りの笛の音が遠くからきこえてくる（実際はきこえないが）。若者が手をのばして前を行く恋人にふれようとするがおいつかない。こんな光景を刻んだツボである。

およそ詩人とは、詩情とは程遠い私である。だけど最高に素晴らしいものには手をふれないでおきたい… といった気持ちはたえずちらつく。時には全力をかたむけて、それに体当たりしてみたくもなる。

ヤロオよりもどりエジンバラからロンドンに向かう途中、私は幸いにも機上からもう一度ヤロオをみる事が出来た。しかも全景である。セント・メリーはなかほどが少しくひれている。ワーズワスの時代はもっと大きかったのではないかとも思った。全景を見渡したこの感激はまた一入であった。

## 離島の水をたづねて

新井 正

私が離島の水の調査に関係しはじめたのは1972年であったが、その後わずかの間に、日本の南から北まで、いくつかの離島を調査する機会にめぐまれた。離島は一般に面積がせまく、大きな河川もなく、水の悩みが共通の問題である。

私が最初に見た離島の水は、三宅島の湖沼である。三宅島は年降水量が3000mmを越える地域であるが、全島を透水性の大きいスコリアが覆うため、水は極端に不足している。三宅島で最も興味深い

のは新澤池である。この部分循環湖の深層は海水であり、その循環速度は30年に一度という結果が得られた。この湖はまだ未知な点が多く、今後も調査をする予定である。測深図の作成から手掛けた三宅島の水の調査は、今後も継続テーマとなることであろう。

北の方では、利尻・礼文島の湖も見に行った。礼文島の久種湖は日本最北の湖で、荒涼とした風景のなかにあった。利尻・礼文島の湖はいずれも腐植栄養湖で、酸性湖であった。

南の方では1974年と76年に日本最南の湖沼群である南・北大東島の湖沼を調査した。大東島は隆起サンゴ礁で、その中央部のかつてのラグーンであった部分に多くの湖沼がある。その数は南大東島で約80、北大東島で約20である。これらの多くはドリネが水没した形を持ち、極めて特異な湖となっている。大東島は冬でも気温が15℃位であり、いわば冬のない亜熱帯の気候である。こゝでは12月に蛙が鳴き、花が咲いている。温度が高いため生産が多く、こゝでもまた腐植栄養湖になっている。水の色は茶色で、それは東北・北海道の沼のものと同じであった。澄んだ沼や池は、温帯のせまい地域のものであるように思われる。

1976年には奄美諸島の調査を行なった。奄美や沖縄の水汲みの労働については、柳田国男の著書にくわしくのべられているが、水道が普及した現在、かつての苦勞を見ることはできない。電気・水道の普及が、伝説的に私たちが理解していた島の生活を大きく変えてしまっていた。沖永良部島や喜界島では農業の機械化、耕地の改良が進められており、日本全体としてみても先進的な農業地帯となっているように思われた。これらの島々で興味をひかれたのは、うすい石灰岩層の下から流出する湧水には神がまつられ、かつては村の中心であったように見受けられたが、現在では立寄る人は少ない。

離島の水のあり方は、一つ一つの島でそれぞれ異っている。また、水と生活のかゝりあいの仕方にも各島でそれぞれ異っている。島の水問題は、陸水学や水文学のみならず、人文現象にも密接にかゝり合う興味ある研究テーマであるように思われる。

## アナウンサー稼業 25年

後藤 美代子

早いもので(というのは些か陳腐な決り文句ですが)卒業し就職して24年、この春から25年目に突入します。10年までは「何の仕事でも10年やってやっと1人前と言われる。10年までは是非やりたい」という目標がありました。でも、10年やったからといって、もうこれでいいという境地に達する筈もなく、もう少し、もう少しと続けてきた結果が現在のものです。

昨年、私が就職した年に生まれたお嬢さん達が入って来ました。それまでにも10才下、15才下、20才下という人達がいたわけですが「あの年に生まれた赤ちゃんが……」と思うと、特別な感慨がありました。

女性の大学進学率が高くなり、卒業後は何か仕事をしたい、職業をもちたいという人が多い現在と違って、まだ「就職」がそれ程歓迎されない時代でした。縁談があり、先方のお父さんが「アナウン